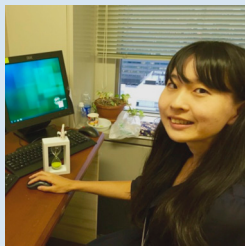




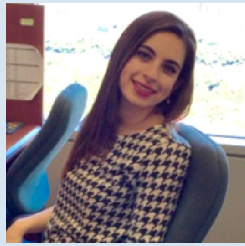
2015 年インターン生たちが語る IMF OAP でインターンシップをすること

国際通貨基金アジア太平洋地域事務所ではエコノミストと広報のインターンを毎年夏に募集しています。そこで、2015 年のインターンシップに参加した 3 人に、体験したこと、感じたこと、得たことについてざっくりと語り合ってもらいました。（国際通貨基金 以下 IMF；アジア太平洋地域事務所 以下 OAP）



明坂 弥香
エコノミスト
インターン

大阪大学大学院
経済学専攻
博士課程後期課程



ノア・タクウ
エコノミスト
インターン

慶応義塾大学院
経済学専攻
博士課程 2 年



立川 七美
広報インターン

ロンドン大学(LSE)
社会政策学専攻
人口と開発
修士号取得見込み

みんなは何でそもそもインターンシップに応募しようと思ったの？

ノア： 経済政策にかかわる研究にもともと興味があって、IMF のような国際機関で働きたいと思っていたの。

七美： 経済学は専門ではないけど、私も社会政策や国際機関に興味があって、実際どんな感じが体験してみたかった。

エコノミストインターンの役割は主に研究だよ？

弥香： そう。私は今、日本の高齢者の資産運用と労働供給について研究しているよ。インターンでは、リサーチ・クエスチョンやアプローチの仕方など、私の提案を上司であるエコノミストの方が尊重して下さって、やりがいがあった。

ノア： 私は、OAP 次長の下、ワーキングペーパー（研究報告書）作成のために研究をしているの。研究内容は、日本の非伝統的金融政策がエマージング・アジア諸国に与えたスピルオーバー（波及）効果を研究しているの。Global VAR モデルを用いて、貿易、証券投資、直接投資のチャネルを通じたスピルオーバー効果を分析しているよ。

自分一人で全部やっているの？

ノア： 自分のやり方で研究を進めさせてもらっているの。指導官に信頼されているってことだけど、責任が大きいよね。適切なモデルやデータを選択したり、データをモデルに合うように変えたりしたから大変だった。データが信頼できなかったり使用できなかったりと問題があったけど、文献を参考にしたり、IMF のエコノミストの意見を聞いたりしたよ。研究の重大な決断をするのは大変ではあるけど、おかげで以前より自立して自信を持って研究をできるようになったと思う。

七美： 私は広報インターンとして、主に一般の方の IMF に対する理解やサポートを促すという役割を担っていたよ。例えば、一般の方向けのイベントの準備をお手伝いしたり、IMF についてのパンフレットを作ったりした。



INTERNATIONAL MONETARY FUND

The Regional Office for Asia and the Pacific

ノア：パンフレット作りすごく頑張っていたこと、覚えているよ。

七美：うん、あれは大変だった！お台場で行われた、グローバルフェスタというイベントに出展して、私の作ったパンフレットを配ったの。実際、ブースに来てくださった方がパンフレットを手にとり、分かりやすいとってくれたのがすごく嬉しかった。OAPの広報インターンとしてやりがいがあるのは、毎年、インターンは必ずパンフレットなどを製作して、それがずっと使われるということなんだ。実際、そのイベントで配ったIMFグッズも去年の広報インターンが企画・作成したものなの。

IMFでの研究は博士課程の研究とどこが違うの？

弥香：研究のやり方自体に大きな違いはなかったけど、指導官との距離が近いことで、迷った時に気軽に相談できるのが良かった。OAPのオフィスでは、ミーティング等がない限りドアを開けたままだったから、OAPに来た初日はそれに抵抗があったけど、こうして気軽に相談したり質問したりしやすい環境作りがされているのだな、と後になって納得したの。それと、普段の私の研究では、アカデミックでの貢献が何かをまず考えて、次に政策的インプリケーションを考えることが多いんだけど、IMFのプロジェクトは政策が第一にあって、それにどうアプローチしていくか、ということが問われるので、いつもとは違う脳みその使い方をしたように思うかな。

エコノミストインターンをやるにあたって、何か必要なスキルはある？

ノア：基本的に、経済理論の知識はここでのインターンシップで役立つよね。でも、統計ソフトウェアのプログラミングやコーディングの知識もあるほうがいいかもしれない。研究の時間を節約したり、早く計算したりするのに役立つと思う。



インターンを始める前、不安だった？

ノア：私個人の研究では、実証分析を用いているから、インターンシップを始めたときは、私の経済理論的背景がIMFでのプロジェクトには不十分ではないかと思っていたの。でも後で気づいたんだけど、一番大切なことは研究に興味を持っていて、コミットしているかということなんだと思う。もしかしたら、知らないトピックが研究題材になる場合もあるかもしれない。そんなときに、十分な知識がなくても、新しいことを学ぼうとする姿勢で補うことができるはず。

インターンシップを通じて得たことは？

弥香：自分の研究について、労働経済のバックグラウンドを持たない人に対して分かりやすく説明するにはどうしたらいいか、ということを含め、今までより強く意識するようになったかな。普段、大学院の研究室や学会会議では、トピックを理解している人が大部分のため、自分の研究の社会的な意義を説明する機会は多くはなかったの。一方、IMFでは、別の分野を専門とするエコノミストに、自分のリサーチを一から説明することが多くあったの。自分の研究の社会的・学術的意義を第三者の目から考える機会と、説明をするために自分の理解を確認し直す、いい経験になったと思う。

七美：私は、このインターンシップを通じて、国際機関で働くという経験を得ただけではなく、広報とはどういう仕事なのかということへの理解が深まった。私の上司は素晴らしい方で、貴重な経験や知識を共有してくれたの。おかげで、資料を読む人にメッセージを効果的に伝えるというスキルが身についたかな。どの分野にも応用が利いてかつ必要不可欠なスキルだと思うから、インターンシップをしてよかったと思っているよ。

インターンシップをしてよかったことは？

弥香：IMFのエコノミストやスタッフの方とランチをしたり休憩時間にお話したりするのが楽しみだった。大学では、職員の方とご飯を一緒にさせて頂く機会がなかなか無いので新鮮に感じたのと、スタッフの方のバックグラウンドが多様で話を聞かせて頂くのがとても面白かったな。IMFではスタッフ同士がとてもフランクなのが、私には過ごしやすかった。



INTERNATIONAL MONETARY FUND

The Regional Office for Asia and the Pacific

ノア：会議や打ち合わせにも参加できて、IMF がどのように動いているかを知れたことかな。もちろん、エコノミストとお話をして学べたことはすごくよかった。

七美：私も OAP でロールモデルになるような方々にお会いできて本当にありがたかった。広報チーム以外のスタッフの方々も、仕事と私生活に関してのアドバイスを下さって、いつも励ましを送って下さったの。あと、二人といい友達になれてよかった。お互いの将来の夢や目標を語り合う中で、私も自分が情熱を持っている分野で頑張りたいなって思うことができた。

二人の目標が何だったかをまた話してもらえ？

弥香：ずっと研究が続けられたら嬉しいなあ...と思って、研究を頑張っているよ。今回のインターンに参加したことで自信がついたから、今までより挑戦してみようって思えるようになった気がする。

ノア：IMF や国連のような政策決定に関わる研究機関で働くことを目指しているの。研究を通じて、世界の国々や地域、特に私の出身の中東における経済の安定化に貢献したいと思っている。

七美：私は、中・低所得国でのリプロダクティブヘルス（生殖に関する健康）に貢献したい。今秋から、東京で経営コンサルティングのアナリストとして働くよ。将来的には、コンサルティングで培った分析能力と大学院で研究した分野の知識をベースとして、グローバルヘルスの政策立案に携われたらいいなと思っているよ。

じゃあ、最後に真面目な質問なんだけど、来年インターンを応募される方に伝えたいことってある？

ノア：特定のスキルを持っていなかったとしても、それにストレスを感じないでほしいですね。それより、研究に対する決意と意欲を持って、自分の最善を尽くすことが大切だと思います。意欲を高く維持しながら、空いている時間に、自分があまり経験のない分野についての文献を読むことをお勧めします。

弥香：学校で進めている自分の研究もあるだろうから、2ヶ月もインターンに参加するのは抵抗があると思いますが、絶対に後悔することは無いのでぜひ参加してみてください。勤務時間は9時～17時なので、朝や仕事終わりに自分の研究をする時間も結構取ることができました。

七美：OAP のスタッフの方々のお話を伺って、グローバルに働くこととはどういうことなのかということ深く考えることができました。このインターンシップを通して、自分のキャリアの目標に向けて一歩大きく前進できました。私は IMF 以外の国際機関でも就業経験をしたことがあるのですが、機関によってカラーが違うことが分かりました。みなさんも機会があったら、複数の国際機関でインターンシップをやってみることをお勧めします。

本レポートは、立川七美が取材・執筆しました。



OAP からの景色



2015 Interns' Discussion
Working as interns at the IMF OAP

The IMF Regional Office for Asia and the Pacific (OAP) provides economist and communications internship opportunities for graduate students every summer. To share their experiences in the OAP, the communications and economist interns for summer 2015 held a discussion. The topics range from their daily responsibilities, skills acquired through the internship, to advice to future intern applicants.

What was your motivation to apply for the position?

Nour: I'm interested in policy-oriented research. So I have always wanted to work at an international organization such as the IMF.

Nanami: So have I, although my interest is not in economics. Hoping to work at international organizations in the next few years, I wanted to experience what it would be like to work at such an organization.

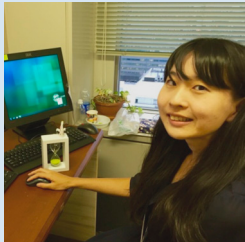
Your roles as economist interns are focused on research, right?

Mika: Yes. I am carrying out economic analysis on asset management and labor supply in the ageing population in Japan. I find the research fulfilling as my supervisor is open to my suggestions and allows me to conduct research in my own way, from formulating research questions to conducting analysis.

Nour: Under the supervision of the Deputy Head of Office, I'm also conducting economic research for an IMF working paper. It is about spillovers from Japanese unconventional monetary policy to Emerging Asian economies. I'm using a Global VAR model to examine spillover effects through trade, portfolio, and foreign direct investment channels.

Are you doing it all on your own?

Nour: I was trusted with a lot of freedom with the research, and thus a lot of responsibility. In addition to choosing the right model, I had to procure the right data, and make it fit the model. I was limited by the lack of reliability and unavailability of data for some countries, so I always referred to the existing literature and the advice of economists



Mika AKESAKA
Economist Intern

PhD Candidate
Graduate School
of Economics
Osaka University



Nour TAWK
Economist
Intern

PhD Candidate
Graduate School
of Economics
Keio University



Nanami
TACHIKAWA
Communications
Intern

Masters Student
Dept of Social
Policy, LSE

at the fund. It was challenging to take on large decisions, but it made me more independent and confident.

Nanami: My basic role in the communications team is to promote understanding of and support for the IMF through contacts with the public. For example, I assisted in organizing events and produced a brochure designed for the general public.

Nour: I remember you worked so hard to put the brochure together.

Nanami: Yeah, it was painstaking. At the 2015 Global Festa in Odaiba, the OAP opened a booth and distributed the brochure. It was rewarding to actually hear people at the booth say they better understood about the IMF after reading the brochure. A great thing about the communications internship in the OAP is that communications interns get to produce something tangible like the brochure. Actually, the novelty goods the OAP offered at the Festa were also made by the last summer's intern.

How is the work at the IMF different from your graduate studies?

Mika: There are largely two differences. First, communication between me and my supervisors is different. In the OAP, the door to the economists' offices is kept open, and I can easily seek advice and ask them questions. Also, the approach to research at the IMF was new compared to what I'm accustomed to. The IMF project challenges me to first think of policy implications and then academic contributions, which is the other way around in my own research.

Given your great responsibilities, what kind of skills do you need to have to work as an economist intern?

Nour: A solid background in theory is useful throughout the internship, but what I would recommend for any economist is to have some

knowledge in programming and coding. They could help you save time and make fast computations with your research.

Were you worried before starting the internship?

Nour: Because I rely a lot on empirical analysis, when I started my internship, I was worried if my theoretical background would be sufficient for the project. But later I realized, what really matters is if you are curious and committed to the research. There are many topics we may not be knowledgeable about. But you can always compensate for your lack of knowledge with motivation to learn, for example, through reading the literature and consulting with the economists.

What have you gained from the internship?

Mika: Through the internship, I've now become more conscious of how to explain my research in an accessible manner to those without the labor economics background. At my graduate school and academic conferences, I had few opportunities to explain the social significance of my research because the majority of my colleagues and audience are familiar with the topic. At the IMF, on the other hand, working with economists specializing in other fields, I needed to explain everything about my work from scratch. This experience allowed me to objectively look at both the social and academic significance of my research and further develop my own understanding about it.

Nanami: For me, the internship has provided me with not only a working experience at an international organization but also basic training to work as a communications professional. By sharing her experience and knowledge with me, my boss has equipped me with skills to effectively develop and present messages to the audience. I treasure these hands-on skills because I believe they are applicable and necessary to succeed in any field of endeavor.

What do you like about the internship?

Mika: I enjoy talking with the OAP staff during breaks. As their backgrounds are diverse, it was interesting to hear their stories. I like how the economists treated me – even though I’m not so experienced, they treated me as a researcher.

Nour: I really enjoyed being included in meetings, conference calls and briefings. I got to see some of the dynamics of working at the IMF. And of course, talking and learning from all the economists at the fund was so gratifying.

Nanami: I was fortunate to meet many inspiring individuals in the OAP. The staff, even outside the communications team, offered me advice and encouragement in terms of both my career and personal issues. I’m also glad that we’ve become good friends. As you’ve shared your aspirations with me, you two have inspired me also to excel in what I’m passionate about.

Can you remind me of your career goals?

Mika: I hope to continue being involved in academic research. The experience in the OAP has increased my confidence in taking on challenges to become a better researcher.

Nour: My career goal is to work in policy-oriented research institutes, such as the IMF, or the United Nations. I’d like to use my research to contribute to the economic stability of countries and regions, especially my region, the Middle-East.

Nanami: I hope to contribute to reproductive health, particularly in low and middle income countries. This fall I’m going to start working as a management consulting analyst in Tokyo. With my analytical skills as a consultant and knowledge in reproductive health gained through

graduate studies, I ultimately would like to be involved in formulating policies at a leading institution in global health intervention.

Do you have anything particular that you want to share with future intern applicants?

Nour: I would advise them not to be stressed about not having a specific economic background for the internship, but rather to show their determination and motivation for the research, and always try their best with their given research. Keep your motivation high, and in your spare time, try to get more acquainted with the topics that you feel unfamiliar to you.

Mika: Given your own research at grad school, some of you might be hesitant to apply for the internship due to the amount of time you will dedicate to it. It’s also been a challenge for me to manage both my PhD research and the IMF project. But I would recommend you apply for the position. I’m sure you would never regret your decision; it would only further your knowledge and career.

Nanami: Listening to the experiences of the OAP staff, I’ve got to think of what it means to work globally. I believe this internship has allowed me to take a huge step forward in my career. The OAP internship was my second time working at an international organization. Since the work, culture, and people are all different depending on the organization or office, if you are interested in working for international organizations, I would recommend that you get experiences at various places.

This report was written by Nanami Tachikawa, who interviewed each interns and collated their comments.